

## 術数学——数と易のパラドックス

川原秀城（東京大学名誉教授）

中国研究者は現在、術数学あるいは術数と聞いたとき、ただちに「雑術末技」として理解し、研究に値しないと考える方も多いかもしれない。その解釈は西欧の学術分類の影響を受けた清の『四庫全書』が数理科学の「天文算法」と擬科学の「術数」を截然と区別したことに由来し、それなりの根拠はあるが、実際のところ、漢代以来の中国独自の学術観をうまく反映していない。

中国歴代の書籍目録（特に正史の芸文志や経籍志）を分析するにせよ、『四庫全書』以前の術数学の定義は数の哲学、具体的には暦算と易学を中核におく数術としなければならない。

だが術数学は暦算と易学を中心として進展した結果、必然的に数と易のパラドックスが理論内部に生じた。理数を追究する数理学的思考と経学として易数を追究する人文学的思考の葛藤／混淆である。

また中国歴代正史の芸文志や経籍志は①数術すなわち術数学と②医術すなわち方技学・方術（狭義）を学術分類上、峻別して二術とし、個々の図書目録を作成したが、同じ正史の方技伝（方伎伝、方術伝）や芸術伝（術芸伝）はそれとは異なって、数術と医術を同一範疇とする別の分類を採用して個人の伝記を記録した。正史芸文志は術数学と方技学を王朝に必須の大術ととらえ、①国家の大典の治暦を中核におく学術と②王官の一守である生者の健康を保持するための学術（生生の具）とするが、他方、方技伝や芸術伝は医学+術数学占術+術数学暦算を方術とよび「巫・医を以て宗とする」。後者によれば方術は単なる小術にすぎず、立伝の目的は方術の学術内容の説明にはない。中国学術の広範さを誇示すべく、雑術末技に従事する者の伝記を紹介したものととらえるべきであろう。わたしは以上を総じて学術的／理論的に術数学を論じるにあたっては、方術と術数を異なる範疇に属する学術と解すべきであり、断じて一物として論じるべきでないと考えている。